

福島報

発行 福島地区小学校長会
責任者 会長 逸見 健二
編集 同 広 報 部

【巻 頭 言】

アントレプレナーシップ教育と人材育成

川俣町教育委員会 佐久間裕晴

突然ですが、「アントレプレナーシップ教育」についてご存知の校長先生はいらっしゃいますか。恥ずかしながら、私がこのネーミングはもとよりその取組を認識したのは、最近のことです。

先頃の厚生労働省の国立社会保障・人口問題研究所が、2050年までの地域別の推計人口の公表が頭から離れなかったことも認識する根底にありました。福島県は、30年後には、人口が32%減るという予測です。そして、地域経済を支える生産年齢人口（15～64歳）は、県内30市町村が50%減少するという厳しい予測も公表されました。そのニュースは、おそらく皆さんもご承知のことと思いますが、当川俣町はその減少率の上位に位置付けられました。当町の人口減少傾向は認識していたものの、公表された数値は衝撃的でした。

もちろん人口が減っても、豊かで、持続可能な地域社会を維持していくことは可能だと私は考えています。しかし、子どもたちは、紛れもなく町の未来の担い手であり、近い将来地域を支えていく存在であることは間違いありません。そう考えると、目の前の子どもたちを今どう育てていかなければならないのか、教育行政に携わる者にとって課せられた命題でもあると強く思うようになりました。なぜなら教育という営みは、学びを通じた地域の人材育成なのですから。

さて、話を元に戻します。日々の教育活動と人材育成を同じ土俵で考えていたとき、たまたま町の研修会でお招きした講師と研修会終了後の懇談の中で紹介されたのが、アントレプレナーシップ教育です。調べてみると、決して目新しい取組でなく、文科省もかなり前から高等教育などで積極的に提唱している教育活動です。

アントレプレナーシップ教育とは、自己の発想や工夫を積極的に社会貢献へ生かす意欲や態度を育てる起業家精神（チャレンジ精神、探究心、創造性等）と資質・能力（情報収集力、判断力、コミュニケーション力等）を育むことを目的とした教育のことを言います。これは、学んだことをもとに、自分も社会の一員として、地域の人や地域社会に果敢に働きかけることができる子どもを育てるための教育とでも言った方がピンとくるかもしれません。

先日、新聞紙面で、『只見線存続のため小中学生が後押し 大人と協力し利活用提案』という見出しとともに活動記事が紹介されていました。まさに、これだと思い、旧知の只見町教育長だったS先生に連絡し、くわしくお聞きしました。只見町では、以前から持続可能な町づくりのために、海洋教育やESDに取り組んで来ました。豊かな自然とりわけ貴重なブナ林や水量豊富な水資源が多くの人々に恩恵をもたらしていることを子ども自らが学び、郷土愛を育むとともに、町や人に直接働きかける活動に力を入れてきたとのこと。余談になりますが、子どもたちが、只見町の米のおいしさや更なる活用の方法などを、農家の方々を始めとする地域の方々に対して何度も足を運んで伝えていった結果、心を動かされた数名の農家の方が、只見の米を使った新たな商品づくりにチャレンジしたのが、今、大人気となっている米焼酎〇〇なのだとか。まさに、只見の子どもたちの取組は、只見ならではのアントレプレナーシップ教育なのだと思います。

誤解のないように…。アントレ教育は、新しい取組をするものではありません。各学校は、すでに総合的な学習や教科でのSDGsへの取組などで、探究的な授業を行っていると思います。しかしながら、その学習展開が、「知る」・「気付く（自分事）」で完結していないでしょうか。そこに「僕らは〇〇していきたい。」という思いを、地域に働きかけ、人に働きかける、実際に「行動する」姿まで繋いでほしいと思っています。日々の教育活動を通して、地域社会に関わっているという意識の醸成こそが人材育成であると思うのです。

新しい二小プライドの創造を

福島市立福島第二小学校長 大内 伸一

かつて教頭として勤務した学校に再び赴任することになり、学校をよく知っているというアドバンテージを最大限に生かしてやろうじゃないかと意気込んでいました。それで、赴任するだいぶ前から学校経営の構想を練り始め、思いの丈を書き綴っていくうちに結構な量になってしまったので、「二小をいっしょに」というリーフレットにまとめることにしました。

そのリーフレットの中身は大きく3つの部分になりました。1つは「二小をこんな学校に」という求める学校像のようなものです。2つ目は「二小の先生方に」として、校長が思う教師観や仕事観などを記しました。これは、私という校長(人間)を教職員に理解していただくために記したものです。

3つ目は、今回私が一番やりたかったことだった「二小プロジェクトタイム(以下PT)」なるものをしようという企画書です。PTで目指すのは、「新たな二小プライドの創造」です。二小プライドは以前から二小にある誇り高き言葉です。その二小プライドを新しく創造しようという壮大なフレーズで先生方を引きつけました。PTで目指すのは、子どもたちのために最善を尽くし教え導く私たち教師が、どんな理想をもって教育をすべきかを話し合うことでした。だから、ベテランも若き教員もみんなが平らになって理想を声にすることが必要ですし、だれかの理想を否定しないことも大切です。そして二小のなにか変えてみようという意思をもって行ってみようとして約束しました。PTは、職員会議の後半(会議は30分を目標に縮減、その後30分をPTの時間に)、わざわざ雰囲気の良い木の教室に場所を変えて行きます。話し合いのテーマは「二小の〇〇〇〇」として、あらかじめ職員室の議題箱に入れられたものから選んで決めます。そうして行われたPTは子どもたちのために最善を尽くそうとする教職員の熱い思いを確認できました。そしてそれぞれの教師の価値観や生き方も垣間見え、お互いの理解が深まるというおまけもついてきました。このすばらしい教職員集団なら新しい二小プライドを創造できるという確信を得ました。

信夫中学校区の校長同士の結びつき

福島市立鳥川小学校長 穂山 俊之

はじめにおことわりを一つ。今回、「特色ある学校の取組や学校経営」というテーマでの執筆依頼をいただきましたが、“本校独自”ではなく、本校のある信夫中学校区の取組について、ご紹介させていただきます。

さて、本地区では、「元気にあいさつができる子ども」や「話をしっかり聞くことができる子ども」など、中学校区単位で目指すべき児童・生徒像を共有し、小・中学校それぞれの独自性を維持しながら、学習面や生活面で連携し合う教育を進めています。

また、保育所・幼稚園でも、園児の資質や能力が小学校教育へ引き継がれるよう、幼稚園の教員などが小学校の教員と意見交換をし、「就学するまでに育ててほしい姿」の共有に努めるなど、発達段階に応じて、保育所、幼稚園、小学校、中学校が連携し合う教育に取り組んでいます。

そのような取組のなかで、みなさまにご紹介したいことのひとつは、「信夫中学校区小・中校長会の定期的な開催(校長同士の結びつき=仲のよさ)」です。

幼保小中連携を推進していくにあたっては、管理職がその重要性を認識し、校区にある学校等の管理職と共通理解を図ることが、重要であることはいまでもありません。

そこで本地区では、小・中学校の校長による会合を毎月、定期的に開催し、その中で必ず幼保小中連携教育を議題のひとつとして取り上げ、取組の検証や改善を図っています。

校種間の接続において起こる「小1プロブレム」「中1ギャップ」等の子どもの不適応や問題行動などは、校種間の保育・教育の進め方、実態を理解し、日々の営みに生かしていくことで、課題解決が図れると考えます。

その「はじめの1歩」は、管理職、特に校長同士の顔の見える関係性、結びつきにあるといえるでしょう。

集まって、顔を見て、「あれだ、これだ」と相談できる校長同士のつながりはとてもありがたく、教えていただく知恵と勇気は道しるべとなります。そしてそこには、互いの気持ちを慮り、一緒に考え、ともに課題を解決しようとする温かさがあります。

今後も引き続き、信夫地区の子どもたちの健やかな成長を図るため、まずは校長同士が思いを共有し、心でつながり、協働し実行できる関係であり続けたいと願っています。



定期的で開催している小・中校長会の様子

南方部の活動について

南方部長 服部 英昭（蓬萊東小）

本方部は1市1町の10校で構成され、各校の在籍児童数は10名から600名までと幅広く、立地環境も市街地、郊外、山間地などさまざまです。方部研修会では、課題研究の推進、各部からの提案、情報交換など毎回、内容の濃い話し合いを実施しています。例えば「担当校による話題提供」の時間がその1つです。

これは、平成24年度から継続している取組で、方部研修会の際に輪番制で担当校が自由に「話題」を話し、その話題についてメンバー全員でフリートークを行う時間です。2年間で全ての学校が1回ずつ話題を紹介することになります。内容は、校長として現在取り組んでいることや、学校経営上の課題など多岐に渡ります。本年度に提供された話題には次のようなものがありました。いじめ問題、不登校対応、就学指導、職員会議の指示・示達事項、働き方改革、欠食に伴う給食費の取り扱い等です。どの話題も近隣校の事例であり、学校規模や立地環境を超えて、各校長が自分事として捉え、自校の学校経営に生かすことができました。また、話題提供校にとっては、多くの校長の考えや助言を得ることができ、その後の判断や対応策を講じるために大いに参考となりました。今後も方部全員の力を結集して研修を深め、校長としての資質向上につなげていきたいと思っております。

北方部の活動紹介

北方部長 菅藤 文彦（御山小）

学校の直面する課題は多岐に及んでおり、さらに複雑化しています。北方部では、各校の実態に応じたより良い教育を目指し、会員相互の情報交換を大切にして活動してきました。情報交換により、自校で判断が求められる様々な場面でとても参考になりました。方部研修会及び方部会が何でも相談しあえる、知恵を共有しあえる場となりました。

本年度の研究では、「家庭や地域との連携・協働を図った組織的・計画的な安全教育・防災教育に関わる取組の推進」について、前年度の研究を踏まえ、研究推進員を中心に研究をまとめ、福島県小学校長会研究協議会会津大会で発表しました。十分な共通理解や協議を行って、一丸となって研究を推進することができました。

次年度の研究「教職員の高い危機意識並びに対応能力の育成と未然防止に向けた組織体制づくり」について、研究を推進するにあたり、研究の方向性について協議を重ねてきました。次年度始めに「教職員の学校安全に対する意識と実態に関する調査」を各校で実施し、それらの結果をもとに、各校や地域の現状を全体で共有し、課題を明らかにしながら進めていく予定です。

信陵・飯坂方部の活動紹介

信陵・飯坂方部長 渡邊 裕樹（平野小）

信陵・飯坂方部は、東湯野小学校、中野小学校が閉校となった現在、小学校6校となりました。学校数が少なくなったことで業務分担は大変になりましたが、その分全員で力を合わせ、活動をしています。

今年度は、県校長会研究協議会会津大会第9分科会において、「子どもの自立と社会参加を図る特別支援教育の推進」の視点で、研究発表をさせていただきました。県内他地区の校長先生と情報交換を行い、大変意義ある研究協議となりました。県大会で協議したことによる成果や課題、各校での実践による成果と課題を改めて確認し、令和6年度の東北連小青森大会での発表に向けて、準備を進めています。

信陵・飯坂方部は、特別支援教育の推進において課題があるという実態から、これまで研究を推進してきました。校長自身がリーダーシップを発揮し、校内で研修会を企画したり、情報提供や指導助言を行ったりしてきたことにより、教職員の意識改革が進んできています。次年度以降も、各校の課題解決に向け、特別支援教育に焦点を当てて研究を深めていくことにしています。6人の校長で知恵を出し合い、児童にも保護者にも、そして我々教員にとってもよりよい学校経営を目指していきます。

学級担任

福島市立南向台小学校長 栗城 敏彦

(能登半島地震で被災された皆様にお見舞いを申し上げます。また、子どもたちの通常の学校生活が早く戻ることを願っています。)

「竹ちゃん、お城へ行こう」 敏ちゃんたちが三人、大きな声で、よびにきた。

この文章は、(愛蔵版県別ふるさと童話館)『福島の童話』(リブリオ出版)に掲載されている作品の冒頭部分です。作者は松田たか子氏です。松田たか子氏は私が小学校5・6年生の学級担任の先生です。松田先生とお呼びします。

父の転勤により、私は蓬萊小学校から会津若松市立謹教小学校へと転校しました。誰1人知っている人がいない教室。でも、松田先生のおかげで同級生のみんなども意外と早く仲良くなり、楽しく学校生活を送ることができました。私は、松田先生からとてつもなく大きな影響を受けた人間です。自主学习ノートは、生物や城郭、船などを図鑑で調べ、内容をまとめました。松田先生からは予想外の大きな赤丸!褒められた後、「好きなことを調べていいよ」

松田先生が企画した天体観測。宇宙への関心を高めました。(TV「宇宙戦艦ヤマト」の大ファンになりました。)

鶴ヶ城天守の石垣を勝手に登って無事に降りたことを松田先生に話したところ、とても驚かれていました。

習字の授業。みんながふざけていたので私もふざけた瞬間、ちょうど松田先生に見つかりみっちり叱られました。

文集編集員として活動した図書室。みんなが回転椅子で遊んでいるので私も遊んだ瞬間、ちょうど松田先生に…。

「出さないと叱られる」と思い、かなり頑張って取り組んだ(自由)宿題・会津若松市のカルタ絵作成。提出したのは私1人。松田先生はとても褒めてくださいました。松田先生は、何度でも何度でも何度でも怖い存在として私の前に立ちはだかり、かなりふざけていた私を叱ってくださいました。でも、褒め上手だったことも事実です。

ある年、ご退職なさっていた松田先生からいただいた年賀状に「今度、童話をつくりました。鶴ヶ城の石垣に登る子どもたちのお話です。この作品のモデルは、栗城くんですよ。よかったら一度読んでみてください。」

人格形成の大切な時期に巡り会えた松田たか子先生。「先生にもう一度会いたいあ」と思うとき、先生の作品である『鶴ヶ城の石垣のぼり』が掲載された『福島の童話』を蓬萊学習センターから借り、大切に抱えて帰宅します。

変わらぬ想い

福島市立平田小学校長 佐藤 裕子

大学時代、声楽(ソプラノ)を専攻した私は、この40年間、「歌がうまくなりたい」と思い続けている。

振り返れば、中学の音楽教師になってからも、たくさんの声楽コンクールやオーディションを受けてきた。オペラ「ボエーム」のミミ役(主役)に受かったときは、本当にうれしかった。東京文化会館大ホールでオペラ「乙和の椿」(佐藤継信の妻・若桜役)の舞台に立ったこと、ウィーンのみじろクフェライン(楽友協会大ホール)で、しかもウィーン交響楽団伴奏でソプラノソロを歌ったこと…夢のようだった。仙台フィルハーモニー管弦楽団と共演したときの感動も忘れ難い。と、成功体験を並べてみたが、実はこの何倍も落ちているし、失敗している。失敗するたび、もっと才能があれば、もっと努力していれば…と、かなり落ち込んでいた。

二刀流の生活も40歳を前に、ついに年貢の納め時がきた。オペラの本番と全日本合唱コンクール全国大会(福島第一中学校合唱部顧問)の日程が重なったのだ。どちらも、オーディション及びコンクールを受けてみないと出演・出場できるかわからない段階で決断しなければならず、子どもたちとの夢を優先した。しかし、この年、合唱部のコンクールは東北大会止まりだった。だいたい人生は、こんなものだ。これを機に、所属していた福島県声楽協会、福島オペラ協会、福島楽友協会合唱団、日本演奏連盟、これらのほとんどをやめた。

その後も、月一回のレッスンだけは受け続けてきた。「ステージは修行の場だ」と師匠に励まされ、細々ではあるが演奏活動も続けてきた。ただ、「教員やっているのにすごい」と言われるのも、「教員やりながらだから下手でも仕方ない」と思われるのも嫌だった。だから演奏会のプロフィールには、教員であることを記載しないようにしていたし、本番前は追い込んで練習した。校内巡視しながら薄暗い教室で声を出し、練習したこともあった。

今年、子どもたちに伝えた新年の抱負は、「30分の発声練習を毎日やる」こと。継続は力だと証明したい。昨日できなかったことが、今日できるようになったらうれしいから。今年も挑戦しようと思う。

役職定年となる会員の皆様のご紹介

令和5年度末で役職定年をお迎えになる会員の皆様をご紹介します。

佐藤 浩昭 校長先生 (福島市立清明小学校)
 山本 巖 校長先生 (福島市立三河台小学校)
 渡邊かほる 校長先生 (福島市立森合小学校)
 服部 英明 校長先生 (福島市立蓬萊東小学校)
 菅藤 文彦 校長先生 (福島市立御山小学校)
 高橋 俊勝 校長先生 (福島市立大笹生小学校)
 大内 剛 校長先生 (福島市立吉井田小学校)
 逸見 健二 校長先生 (福島市立飯坂小学校)
 松田 倫明 校長先生 (福島市立庭塚小学校)



※ 学校番号順のご紹介とさせていただきます。

日々、様々な課題への対応を迫られた中、いつもあたたかく私たち後輩会員を支え、導いてくださいました9名の校長先生方、本当にありがとうございました。

どうぞこれからも、それぞれのお立場からのお力添えをよろしくお願い申し上げます。

本地区生徒指導の状況と今後の方向性 ～県生徒指導部のアンケート調査結果から～ 福島地区生徒指導部長 大内 伸一 (福二小)

県小学校長会生徒指導部でのアンケート調査について、福島地区の主な結果、状況と今後の生徒指導の方向性を確認したいと思います。

【調査A】子どもたちの心のケア

○ SCは73.1% (前年同比) の学校で活用され、1校あたりの平均活用回数は65.7回 (前年比-14.1P) となっていること。SSWは48.1% (前年比+1.3P) の学校で活用され、1校あたりの平均活用回数は6.7回 (前年比-0.8P) となっていること。SC、SSWはその約7割が、児童の心のケアや不登校に係る対応に効果的に活用されていること。

【調査B】不登校、いじめ等

○ 不登校児童は増加しており、前年度から不登校が継続している児童数が増加していること。いじめの認知件数は、83件 (前年比-54) と減少しているが、一つ一つの問題が深刻化しており解決が難しくなっている。

【調査C】ネット・SNS利用の実態

○ ネット・SNSを利用している児童は、80.1% (前年比-4.1P) であった。自分用の端末を持っている児童は61.2% (前年比-1.7P)、ネット・SNSに関するトラブルがあったという児童は4.9% (前年比-3.9P) と減少していること。端末にフィルタリング機能が付いている児童は利用者の54.2%であった。

以上を踏まえ、今後の生徒指導について校長として次の対応が求められると考えられます。

- ① 自校の不登校やいじめに関しての現状を捉え、特にいじめについては、「現に起きている」という危機感をもって早期からの対応ができる校内体制を構築しておくこと。
- ② SC、SSW等を活用し組織的に取り組むことで多面的・多角的な対応に心がけること。
- ③ ネット・SNSについては、学校での指導・対応には限界もあるので、児童への指導とともに保護者への啓発の機会を設定していくこと。

今年度の活動を振り返って

福島地区行財政部長 穂山 俊之(鳥川 小)

今年度の福島地区小学校長会行財政部は、人事の反省や要望活動の根拠となる調査研究、さらには、若手・ミドル・ベテランといった年代別の人材育成に関するニーズ研修を実施し、各学校の課題解決の一助となるよう活動を推進してきました。

以下に調査や要望等の概要をお示しします。

【令和5年度人事の反省】

- 優秀な人材を確保するための採用の在り方
- 管理職の働き方改革及び処遇改善
- 効果的な特別支援教育が実施可能となる人的環境の充実

【行財政調査Ⅰ 教職員配置等調査】

- 復興推進加配をはじめとした加配措置の継続
- 教育相談充実のためのSCやSSWの切れ目のない長期の派遣

【行財政調査Ⅱ 教育施策実施状況調査】

- 学力向上や不登校対応に大いに効果がある少人数教育の継続
- ICT環境の整備及びICT支援員の増員
- 特別支援学級の編制基準の見直しと環境整備の充実

【特別調査 大震災・原子力災害や感染症の影響調査】

- 「教職員の多忙化解消アクションプランⅡ」の具現化に向けた教員業務支援員の継続配置

【行財政部ニーズ研修会】

- 各年代(若手・ミドル・ベテラン)の教員が育つ学校づくりの取組事例の共有化

行財政部は地区中学校長会や県小学校長会と連携しながら活動を進めています。今後も各校長先生方の学校経営に寄与することができるよう努めてまいりますので、引き続き行財政部の活動へのご協力をよろしくお願いいたします。

「2つの元年」の広報部活動を振り返る

福島地区広報部長 長澤 昭仁(庭坂 小)

広報部のメインは「広報福島」の発行です。そして、その目的はこれまでを踏襲し「会員相互の理解と連携を深め、地区小学校長会活動を活発に推進すること」と掲げて活動してきました。しかし、今年度、これまでと大きく変わったことがひとつ。それは、年間の発行回数を4回から2回としたことです。これは、次のような理由により、令和5年度の活動計画作成時に、前任の広報部長の積極的な改革の視点から提案・了承されたことによるものです。

- ① 「全会員執筆の原則」の方針に沿った執筆では、学校数減少により紙面を埋めることが困難になってきた。
- ② 本地区部員には県広報部役員・幹事兼任も数名おり、地区広報紙編集担当者としての負担軽減を図りたい。
- ③ 他地区では、働き方改革の一環として、発行回数削減の方向へシフトする動きが加速している。

また、今年度は定年制度が変更されたことに伴い「定年退職」はなく「役職定年」元年でもありました。そこで、役職定年の皆様から本会へのメッセージをいただくというのが年度当初の計画でした。しかし、「今の立場でどう書けばよいか迷う」「何を書けばよいのか困った」といった声をいただき、当初方針の変更が必要な事態を招きました。当事者会員への思いが至らず、関係の皆様には大変ご迷惑をおかけしました。

もうしばらくは、発行回数減や制度変更などの大きな2つの変更に伴い、掲載コンテンツや執筆者、データによる発行等、様々な見直しが必要な「広報福島の過渡期」とも言えるのではないかと考えています。「2つの元年」の今年度の活動やその反省を踏まえるとともに、会員の皆様のお知恵も拝借しながら、流行り言葉で言えば“持続可能な”広報福島の在り方を探っていきたいと思います。次年度も、広報福島発行への会員の皆様方のご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

編集後記

各方面や専門部の取り組み、志ある学校経営の一端、そして、お人柄が感じられる随想、私にとりましては、すべてが勉強、明日への活力となりました。ご多用の中、快く寄稿いただきました先生方に、心から御礼を申し上げます。ありがとうございました。

最後に、編集担当の不手際のため、発行が遅れましたことをお詫びいたします。

第2号編集委員 高橋 哲也(瀬上 小)